

---

# 偉人パラダイス

野球人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

偉人パラダイス

### 【Nコード】

N3301Z

### 【作者名】

野球人

### 【あらすじ】

俺、杉下<sup>すぎした</sup>勇人<sup>ゆうと</sup>は高校1年。いろいろな理由が重なり織田の先祖と同居している。親もいなければそこまで特別に親しい友人もいない。次々に現れる歴史的有名人の子孫を相手にするのは予想以上に辛かった……。

## 『先祖』

君たちは昔の偉人たちを知っているだろうか？この人たちがいなければ今のこの世はないだろう。

俺の名前は杉下<sup>すぎした</sup>勇人、偉人の話をしているが別に俺の先祖が偉人というわけではない。

「ちよつとー！ 勇人まだ？」

「少し待てよ……」

こいつの話をするためにこの話をした。こいつは織田<sup>おだ</sup>美長<sup>みなが</sup>少々めずらしい名前だがこれは歴史的有名人、織田信長の子孫で信長から文字とつたらしい。

「遅いなー！ 学校に遅れるじゃない！」

「悪い悪い……」

「帰りに何かおごりなさいよ！」

「なんでそうなる……」

信長の性格を受け継いでいるのかけっこうせつかちだ……。しかしホントに時間がギリギリだ。

「急ぐか、遅刻する」

「だから最初からそう言ってるじゃない！」

……朝からうるせーな

なんとか学校に間に合い、朝のHR<sup>ホームルーム</sup>が終わった。ちなみに俺たちは高校1年、大東<sup>だいとう</sup>高校に通っている。

「今日もギリギリね。ホント進歩なし……」

ため息交じりに言ってきたのは豊臣<sup>とよとみ</sup>実理<sup>みのり</sup>、織田の次は豊臣だ。さすがに今は昔の家来の関係はないし、親友ぐらいの仲良さだ。

「あつ！ 実理〜！」

「おはよう、美長」

2人の話を聞きつつ俺は帰りになにをおごらされるのか・・・と考  
えていた。

特に今日は何も無く学校が終わり、いつもどおり美長と家へ向かっ  
ていた。ちなみに俺たちは俗に言う  
幼馴染というやつだ。

「さすがに少し寒くなってきたね〜」  
と美長が言い出したので俺も答える。

「そうだなあ、さすがに10月、もうすぐ11月だからな」  
そろそろ夏服しまつて冬服にしなきゃだな〜

「・・・勇人？」

考えていた俺を美長が見ている。っていうかこいつ小さいなあ〜、  
150cmあるか？ぐらいだし・・・知ってたけど。

「こ、今度は何ジロジロ見てんのよ」

「いや〜、美長はやっぱり小さ・・・」  
ドガ！

「ぐっ!？」

いきなり俺の腹部に激痛が走った。なにごと!？

「小さくて悪かったわね！」

美長はなぜか怒ってしまった。身長が低いことを気にしてたっけ？  
というか身長のこと言ったのになぜ胸を手で覆っているんだ？

まだ痛む腹をかばいつつ帰宅。

「ただいまあ〜」

と俺。

「ただいま〜」

と美長。なぜ美長がただいまなのかは、深い、深い、ふか〜い事情  
があるのだ。で結局俺と美長は

『同居』という形になっている。このことがクラスの連中にバれる  
と少々、というか普通にやっかいだ。

この織田、性格はあれだが見た目は・・・まあ俺が言うのもなんだがすごくかわいい。普通にそこらの雑誌に載っているモデルよりかわいい。小さいからキレイというよりかわいいのがいいと思う。

「ねえ勇人、今日のご飯何？」

「ん？今日は・・・何がいい？」

「まあ何かはわかってるけど・・・」

「グラタンがいいな！」

「はいはい・・・」

「やっぱり・・・こいつに聞くと絶対『グラタン』だ。」

「早く作ってよ！」

ちなみに家事は全て俺がやっている。さすがにもう高1なので洗濯物ぐらいいは自分でやってほしいんだが・・・

もう一つ。美長の家事スキルは0に等しい。前にゆで卵を作らせたら電子レンジが大爆発を起こした。

なぜレンジなのは予想がつくだろう・・・

俺がグラタンを作っている間、美長はと言うと・・・自由そのものだ。好きなTVを見たり、ゲームをしたりと遊んでいる。まあそっちのほうで静かでもいいんだけどな。

そろそろできるから食器などを美長に用意してもらおう。

「お〜い美長、そろそろできるから準備して・・・？」

「スースー・・・」

美長のやつ寝てるし・・・。こいつ寝るとホント美少女だなあ。

・・・何も言わなかったらけど。

などと考えていたら・・・

「ん〜、ふあ〜」

かわいいあくびと共に美長が起きた。そして俺の顔を見ている。

「・・・何よ」

急にしゃべられたので俺はびっくりして・・・

「い、いやなにも・・・じゃなくて！夕食できたぞ？」

しかしずっと一緒に住んでたからあんまりわからなかったけど、最近美長つて急に女っぽくなったよな・・・

胸のほうはまだただけど・・・

「ふっ！」

「ぐはっ！」

いきなり溜め0のフックを俺に決めてきた。なんだ!?

「な、なんだよ・・・」

「いやらしい目でどこ見てんのよ・・・?」

少し顔を赤らめてこっちを見ている。俺ってそんなにいやらしい目をしてますかね?

「どこも見てねーよ!それより早く食卓につけ」

「うん」

はあ、さっさと食べよ・・・

食べてる間、美長と今日あったこと・・・と言ってもほとんど同じ行動しかしていないのでテキトーな世間話をしていた。

「それでね、実理がね・・・」

俺が作ってやったグラタンを食べながら学校で聞いたウワサ話をしている美長。ホント楽しそうだな。ここで1つ疑問があるだろう。家事は全て俺がやっていると言ったが親は・・・いない。俺の両親は俺が産まれて5年後に事故で亡くなった。新しい薬品の開発の仕事をやっていたのだが、その研究所がなぞの大爆発を起こした。爆発の原因は今もわからない。なにしろ研究所が全部ふつとんだからな。まあ今となってはどうでもいいことだ。

「ねえ、聞いてる勇人?」

「ん?ああ・・・」

「ちゃんと人の話聞きなさいよね!」

「はいはい・・・」

お前が言うことか?と思うがもちろん口に出さない。またフックをくらいたくないし・・・。

「ごちそうさま」

「ごちそうさま」

2人して食べ終わったので食器を片付ける。洗うのは・・・もちろんこの俺だ。

「おい美長、先に風呂入れ」

「はいよ」

よし。さっさと美長を風呂に入れて俺はゆっくりしよう。女の風呂は長い・・・と言うか美長は長すぎる。1時間以上なんて普通だしな。

「ふゝ、少し寝るかな・・・」

ソファで寝転び目を閉じた。

・・・それから何分かつたところに

「うきやー!」

「!?!」

な、なんだ!?!美長の声は・・・脱衣所から、か?イヤな思い出しかないがとりあえず行くか・・・

「お、おい!どうしたんだ!?!」

脱衣所の扉の前(とうぜん閉まっている)から声をかけると・・・

「ゆ、勇人ー!?!」

「!?!」

な、なんと裸の美長が飛んできた!なにごと!?!

「な、な、なんだよ!」

「む、む、・・・む」

なんだ?『む』?こいつ壊れたか?

「虫!があ!いるの!」

あゝ、虫か。こいつ大っ嫌いだったな。とその前に・・・

「おい美長、いつまで俺にだきついてんだよ・・・」

「?・・・!?!」

一瞬考え込むなよ。美長はバツと手を離し、その場にへナへナと座り込んでしまった。

「虫ってどこだよ・・・？」

「ってか女のシャンプーかなんかの香りがしてイヤなんだが・・・するとコソコソ・・・」

「？」

クモ・・・だ。しかもすごく小さい。虫ってこれか？

「・・・」

俺はパタパタとクモを逃がすように窓に追いやって外へ出す。美長はと言うと、座ってボー然としている。

「おい、もう大丈夫だぞ」

「え？・・・あ、うん」

「ってかな、あんな小さいクモなんかで大声出すなよ」

近所迷惑だろうに・・・

「大きさは関係ないでしょ！あんな、む・・・昆虫を私のお風呂に入れないですよ！」

大きさは関係ないならあんなに驚かなくていいし、虫と昆虫を言い分ける必要があったのかと思うし、そもそも俺ん家の風呂だし、とまあたくさん言いたいことはあるんだが・・・

「美長。いろいろと言いたいことはあるが2つ言う」

「な、なによ」

座ったまま美長はこっちを見上げてくる。しかも少し目が潤んでる。・・・そんな目でこっち見るな。

「1つ・・・まず服を着るかバスタオルをつけてくれないか？」

「！！！」

ガス！ ドン！ ピシャ！

俺が殴られ 壁に激突 美長がドアを閉める音

・・・いってーな。こっちは見えないように必死でお前から目を反らしていたのに。

「あと1つ・・・」



「な、なによ！」

これはこれで大切だから言っておこう。

「クモは昆虫じゃないぞ？」

「今、言うことかぁー！」

バン！とドアを開き、俺に飛び掛ってくる。おい！や、やめろ！

「私はてつきり謝るとか、心配してくれるとか思ってたのにー！！」  
な、なんだこいつ！？言ってることが意味不明だ！しかもあわてて着たのかパジャマが・・・すごくきわどい感じになってるぞ！？

「お、おい！美長！」

だ、ダメだこいつ何も聞いてねえ！今、美長は小さい体を生かして倒れた俺に乗っかって叩いている状態だ。そして暴れているので・・・パ、パジャマが

「美長っ！」

大声で言ってもまだ続けるので・・・仕方が無く俺を殴る美長の両手首を持ってひっくり返す。結果的に俺と美長はさっきと逆の位置になった。なってしまっていた・・・。

「あっ・・・」

そして今、俺は気付く。俺は美長の手首を押さえつけている。対する美長はもう半泣き、というか泣いている。一言で言うと俺は美長の上に乗っかって美長を床に押さえつけているのだ・・・。

「あゝ、えゝとこれはだな・・・」

なんとか弁解しようとする俺。しかし・・・

「し、死ぬ〜！」

見事に右ストレートが決まった。俺には弁解するチャンスも無いんですか？

「くっそ、いてて」

俺は気絶していたらしい。今は深夜の2時。ずっと脱衣所の前で倒れていたのだけっこう寒い。

「ソファで寝るか・・・」

今さら寝室へ行く気にもならないのでソファに向かう、が先客がいた。美長だ。

「はぁ・・・」

ため息をつきつつそばへ向かう。美長は小さく毛布に包まっていた。そして頭をなでてやると・・・

「ふにゆく・・・」

こうして見てるとなんか妹みたいだな。こんな凶悪な妹はいないと思うが。そしてそのまま俺もそばに眠った。

『先祖』（後書き）

初めて投稿させていただきました。野球人です。

書くのは予想以上に難しくいろいろと試行錯誤をしました・・・。

しかし読んでくださった皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

更新は遅いと思いますがよろしく願います。

## 『苦悩の日々』

・・・みなさんこういうシチュエーションはどうだろうか？幼馴染の美少女がとなりで寝ていて、起きるなり『おはよ・・・』とかわいい声で言ってくれる。それは全国の男子が1度は望んだことのあるシチュエーションだろう。・・・しかしその幼馴染で美少女が『ハッ！』とした顔になり、鬼人のごとくボコってきてあげくのはて縄で数時間しばられたら。・・・シチュエーション不成立としか言えないだろう。と言うわけで休日朝は始まった・・・。

↳数時間後

「というわけで実理たちと遊びに行くことになったの」

「へへ、そうなんですか・・・」

「最初は家だったんだけどさすがにバレたらまずいじゃん？だから変更したの。よかったよね？」

「はい。それはもう・・・」

「やっぱり！さすが私ね！」

「さすがでございます。ところで・・・縄ほどうして」

「ヤダ」

「くっそー！！」

なんで俺がこんな目にあわなきゃなんねーんだよ！・・・理由は実のところわからん。

・朝、俺と美長は2人で目を覚ました。

・美長はソファの上、俺は下で寝ていた。

・・・この2つでなぜこんなにキレてんだこいつは！わけがわからん！

「じゃ、夕方にはもどるからね」

「あーちよ・・・縄ほどうして・・・」

ガチャリと、扉が閉まり俺はつるされたまま放置された。

なんとか縄を抜け出せたのは約5時間後・・・

「いや、あいつがいないと家も平和だなあ」

けっこう久しぶりに1人になれた俺は思わず本音を言った。その後はTVを見たりPCをいじったりと自由に過ごせた。

すると5時もまわった頃・・・1通のメールが届いた。送信者は・・・美長。

『急いでどっかに隠れて！理由は時間がないから後で！』

とのこと・・・よくわからんが必死さが伝わってくる。ひとまず言われたとおりにしよう、と思い俺は押入れに入った。

その直後・・・

「へ、美長ん家始めて来たけど・・・。案外フツーね」

と、あきらかに美長とちがうセリフ。この声は・・・み、実理！？なぜあいつが！？少し戸を開け外を伺う。

「あ、ごめん美長。いきなり・・・」

「う、ううん。全然いいよ！」

あはは・・・と苦笑いしている美長。なんもよくねーよ。こっちはそのせいで狭くて暗い押入れに入ってるんだからな。

「じゃ、ちよっとお風呂借りるね」

と言って実理は風呂へ言ったようだ。なぜ人の家で風呂？と思いつつ一回押し入れから出ようとしたら・・・

「み、美長!？」

実理の驚いた叫び。あわてて出しかけた体を押し入れに戻す。

「な、なに!？」

脱衣所での会話を聞くことにした。

「あなたって確か・・・1人暮らしよね？」

「う、うんそうだけど・・・」

あいつ、隠し事とか苦手だから大丈夫かな・・・？

「な、なんで男物の下着があるわけ・・・？」

「!?!?」

し・・・しまった！洗濯物を干しっぱなしだった！これは最初からやばいぞ！と思っっていると・・・

「そ、それは・・・」

なんとかごまかそうとする美長。

「それは・・・？」

それは・・・？

「しゅ、しゅみ、そう！私の趣味！」

「!?!?!?」

もう一度言う。美長は隠し事が苦手だ。ってあいつテンパってわけわからんことを言い始めたぞ!?

なんだよ男物の下着を集めるのが趣味な女子って、ありえんだろ。

なんとかかさっきのピンチを切り抜けた美長は今だ微妙な顔をしている実理と一緒にリビングへ来た。

しばらくは平和に女子同士でしゃべっていた。するとやはり女子、ガールズトークの定番。恋愛の話をしだした。俺はこういうのは苦手だし、盗み聞きしてるみたいでイヤなのでなるべく聞かないようにした。しばらくそうして押入れの中になるとなにやら話しのネタでハイテンションになってきた実理がこんなことを言い出した。

「そっういえば美長、あんた身長あんまり伸びないね」

「うん・・・、なんでだろ・・・」

実理も高いほうではないが美長よりは高い。すると・・・

「胸も成長しないね」

なんて会話だよ

「う、うるさい！私は・・・人より少し成長スピードが遅いのよ！」  
またイヤな会話をし出したな・・・と思っっていると。

「っりゃー！」

「ひゃわ!」

な、なんといきなり実理が美長の胸をさわりだした!女子同士のコミュニケーションと聞いたことがあったが・・・ホントだったとは(??)

「ちよ、ちよつとやめてよ!」

「いいじゃんか、女同士なんだし」

いやらしく笑う実理。手つきが女っぽいぞ・・・。と想像したら後ずさった美長は押入れ(俺の隠れ場所)の方に来た。っていうか、つっこんできた。おい、まさかこれってやばいんじゃないか・・・

「ひゃ!」

「美長!?!」

グシャつと押入れの扉が壊れ・・・

「・・・勇人?」

「・・・こんばんは」

バレちゃったよ・・・

『苦悩の日々』（後書き）

野球人です。更新はとてもバラバラで1日に何回か更新することもあればしばらくしないこともあります。申し訳ありません。

この『偉人パラダイス』はまだまだ続くのでよろしくおねがいします。



『3人で・・・』

（事情説明中）

「「と云うわけだ（なのよ）」  
2人同時に言い終わる。

「へへ、なるほど・・・」  
なにか変なことを言い出しそうな雰囲気だったので  
「ところでなんでお前は言えに来たんだ？」

美長はなぜか真つ赤になり固まっているのでご本人に聞いてみた。

「実はね、私の両親が海外旅行に行つててその飛行機がなにかの  
トラブルを起こしたらしくて・・・」

「それはまた大変だな・・・」  
「で、同時にストライキとかなんか起きちゃって年単位で帰つてこ  
れないの」

・・・ほんとに大変なことになつてるな。

「うわ・・・両親は無事なのか？」

「うん。まあ治安の良い国だし、ホテルも無料になるからって向こ  
うに泊まるみたい」  
ずいぶんとのん気な親だな・・・まあ無事なら安心だ。

「そのことを美長に言つたら『私の家に来なよ！』って言うから・・・」

けっきょく自分のせいじゃねーかよ。美長。

「で、美長。けっきょくどうすんだよ」

「どつてなによ・・・」  
こいつは話を聞いてなかったのか？まあいいや。

「実理1人を家に帰すわけにもいかないしな・・・」  
最近はなにかと物騒だ。しかも今はなんやかんやで12時を回つて

いる。女子を1人で帰すわけにもいかない。

「私のことは気にせず。2人の邪魔なんてしないからさ」

・・・またこいつはそういうことを言うし

「そ、そんな！実理！私の家に泊まりなよ！」 俺の家です。

「私にはそんなことできないよ！」

なんか実理がのってきたし追い返して皆にチクられてもあれなので

・

「おい、実理。泊まっていけ」

仕方がなくそう言ってやった。なんとなくイヤな予感はしていたが

・

「え！いいの？ありがとう勇人！」

・・・なんかこいつ『計画通り』みたいな顔したぞ？

「じゃお言葉に甘えて」

ここ、杉下家はもともと両親と俺の3人で暮らすつもりだったのだからそれなりの広さはある。しかし3人ぐらしになるとはな・・・。

『3人で・・・』（後書き）

今回も読んでくれた人ありがとうございます！

進むのが遅くてすみません。

学生なので土、日しかたぶん更新ができないと思いますが  
お願いします。

気軽に指摘、感想をお願いします。

## 続・苦悩の日々

杉下勇人の今までの一日は、こうだった。学校のある日は自分で起きれない美長を起こし、二人ぶんの朝食を作り登校。休日はテキストだ。しかし・・・

なぜ一人増えたらキッチンが吹き飛んでるんだよ・・・。

「.....」

「えへへ.....失敗」

「えへへ、じゃねーよ!」

理由を聞くとキッチンで理科の実験・・・もとい料理をしていたらしいんだが。

(どう見ても理科の実験じゃないか・・・)

と言うわけで今週の休日二日目はいきなりキッチン爆破というありえん現象からはじまった。なので昼、夜はファミレス、朝はパンになった.....

「で、お前らは何を作ろうとしてたんだ?」

「ベーコンエッグ」

「どう考えたらあれでそうなる?」

卵とベーコンはあった。しかし理科の実験でしか見たことないような薬品が並んでたような?

「はあ.....これから不安だ.....」

ファミレスとか以外は何するかって? たぶん女子二人にいろいろ連れ回されるだろうよ。ハハハ.....

「そろそろ帰ろっか」

と、実理が言ったので俺たちもうなづき会計を済ませ(俺が全部払う)キッチンが爆破された家へ帰る。



## 続・苦悩の日々（後書き）

更新が遅くなりすみません。

またも自己都合により短くなっております。

しかし！これからの波乱の展開へのステップだと思い（？）お許し  
ください。

では感想、ご指摘、お待ちしております。

## 続々・苦悩の日々

「あ、私、買いたいものがあつたんだ！」

実理が言つたので美長が

「じゃ、私も行く〜」

と言つので俺も行くのか・・・と思ひ振り返るが

「あれ？勇人も来たいの？」

なんて言つてきた。できれば行きたくないんだが？ふと実理の顔を見ると・・・わ！絶対なんかたくらんでる！

「い、いや。俺は先に帰つてる」

「そお？別に来たかつたら良いのよ？」

・・・こいつ。女じゃなかつたらしばいてるぞ。まあ二人を見送り俺は家へ向かう。そついや前は下着売場に連れてかれそうになつたっけ？

俺は久しぶりに一人でゆつくりすごせた。あの乱暴娘×2が帰ってくるまで何しようか、と思つていたら寝てしまい起きたら夕方の六時三十分。貴重な時間を少し無駄にしたようだったがたまには良いか。

「たっだいま〜！」

「おじやま・・・ただいま！」

お前はおじやましますで良いんだぞ。実理。

「もう！こんなところでゴロゴロしないでよ〜！」

ガスツと俺をソファから蹴飛ばす美長。そしてそこに自分がそこに寝ころぶので余計にむかつく。

怒らないのかつて？そりゃ・・・怒りたいよ？怒つても仕返しが必要な・・・な。

続々・苦悩の日々（後書き）

本日2度目ですが短いです。  
いつもすいません・・・



## ボーイ

俺の家では代々、女の立ち位置が……。たとえるならスライムと魔王くらい？違う。そのことに悲しんでいると

「何？その顔？」

「性格のしよぼさが顔に出た？」

がまん、がまん……。と思いつつ、夕食はまたファミレスに向かう。

ファミレス内へ

「そっぴや街ですごいかっこいい人いたよね」

「うん！かっこいいって言うか、『美少年』って感じの子」

「はあ？美少年？」

美少年とカッコいいはちがうのか？

「うんうん。ぱつと見は女の子だっよね！」

「でも、どこかで会ったような……。？」

「なんだ？会ったことあんのか？」

俺は美長にたずねる。

「ん〜。確か勇人も居たような・・・？」

「そりゃそうだ。ほとんど一日中いっしょだからな」

「でも、わかんないなら考えても仕方がないんじゃない？」

仕方がないんじゃない？じゃねーよ。美長なりに必死で思い出そうと・・・

「そうだね！もう帰ろっか！」

「・・・。」

帰り道も二人の女っばいその美少年の話を聞きながら帰る。

「美長！今日いっしょにお風呂入っていい？」

## ポニー（後書き）

終わり方がなんとも微妙な・・・w

こういう展開が苦手な人はすいません。

次は少々こっぴどいのが入ると思われますが一時的なのでご安心ください！

ではご指摘、ご感想お願いします！

学校で・・・

「え？いいけど・・・。なんでよ」

「私には美長の成長を見なければならぬのです！」

「ちよつ！どこ見て言ってるの!？」

・・・お2人さん。せめてそういうのは俺のいないところでお願いします。

「勇人さん？のぞきはいけないよ？」

「のぞかねーよ・・・」

正直、こいつのこういうのは慣れてしまった。いけないことなのはわからん。

「え〜。だって興味があるんでしょ？」

「はい？何に？」

「美長の体に」

言っておくがありません。

「まあ、とにかく俺にはそういう興味は無いし、別に見たって何の得にも・・・ぐは！」

「何？得があつたら見るわけ？ん？なんか言いなさいよ」

腹部にめりこんだ美長の拳。次は・・・首絞め!？死ぬって!

「何黙ってるの？言いたいこと、あるんじゃない？」

「・・・!・・・!？」

「美長。首」

「あ・・・」  
「パツ

「ぐえ！」  
「ドサ

と、まあ美長の恐ろしさはこんなもんだ。身長は小さいし、筋力自体も女子の平均なんだがスピードと技に長けている。その後は特に何も無く明日の学校へ備えて早めに寝た。

（翌日）

さあ、月曜日。気持ちを入れ替えて無理だよな。まだ俺の体は完治していないし……。

美長たちは昨夜に引き続きその『美少年』の話をしていた。あきないものなんだろうか？

いつも早起きな実理がいるおかげで（せいで）早く学校に着いた。自分の席に荷物を下ろすと……

「あ！あの美少年だ！」

「え？あ！ホントだ！」

美長と実理が言い出した。見たことあるって……同じ学校かよ。

「ほら勇人も見て！」

「言つた通りでしょ？」

言われて見ると……確かに美少年だが……。あれは

「……朝日」

「！？は、はい！？」

その美少年は知り合いつていうかクラスメイトの横川朝日よこがわあさひ。あまり活発では無いが一応、俺の友達の中で数少ない常識人だ。

「ってなんだ。杉下君か」。今日は早いね。いつもギリギリなのに「ま、まあな」

朝から本を読んでいたのかその本を手にニコツと笑顔を見せる。同姓とわかつているが少しドキツとしてしまう。

「あれ？勇人。この人と知り合いなの？」

「なんで言わないのよ！」

「言わないも何も同じクラスだろ」

「「え！？」」

……バカかこいつら。まあ目立たないしな。それに……  
「お前らよりおとなしいででで！痛いんだけど！？」

「どっしたの？いきなりさげんで？」

「うるさいじゃない」

こゝこいつら。朝日に見えないように俺の足を踏み抜いてきた。

「そ、そろそろ皆が来る頃だよ？」

何かに気付いたのだろうか、朝日は席に戻るようにつながす。

「そうね。じゃあまた。え〜と・・・」

「朝日です」

「そう！朝日君！」

美長。名前くらい覚えてやれよ。

学校で・・・（後書き）

さて。新キャラ登場です。しばらくはこの朝日君の話になると思いますが。

次の予定では少しずつ勇人たちのクラスメイトと学校をあきらかにしていこうと思います。

では、ご指摘、ご感想、お待ちしております。

## クラスメイト

さて、HRが終わり1限目は体育。体育でやったー！なんて言われるのは小学生までだ。

なぜこの寒い中半そで、半ズボンで外に出なくちゃならん。とりあえず体育の筋肉教師こと山岡真斗先生やまおかまひとににらまれないうちに走っておくか……。

山岡先生がきてさっそくこんなことを言い出した。

「えー。まずある事件からだ。おい、問題児トライアングル（山岡先命名）前へ出る」

すると2人の男子生徒が立ち上がり前へ出た。

1人は身長185cm近くある佐藤光矢さとうひかり。問題児トライアングルの中でも一番の問題児だ。

次は男子にしては小柄な岡田義明おかたよしあき。機械の操りに長けている。……

まあ下心が丸見えだが。そして……

「おい、何している。早く出る。杉下」

「はいはい……」

トライアングルのリーダーこと俺。だが三人の中ではダントツに点数、成績は良い。（ていうか2人がダントツに悪い）なぜリーダーになったかというところ……。たぶん入学式のことを覚えられてるからだろう。

「さて。本題だ。今日女子更衣室からこんなものが見つかった」

と言って山岡先生がポケットから出したのは黒い小さな物だった。

「これは……?」

「どうも小型カメラらしい」

女子更衣室に小型カメラって……。

「それっていけないんじゃない……」



素直に俺はそう言った。ちなみにこれは俺の物ではもちろん無い。

「ああ、杉下の言うとおりで。リーダーのことはきちんと聞かなくてはな。なあ、岡田」

「!？」

本人はバレた！？的な顔をしているが俺は小型のカメラと言われた瞬間わかつたぞ。こいつはそろそろ警察に行ったほうがいいと思う。公共の福祉として。

「さらに女子更衣室の床に小さな穴が空けられていた」

山岡先生が写真を見せる。そこには更衣室の隅に小さな穴が空いていた。どうやら更衣室の外から掘られたものらしい。

「・・・これは？」

「一応聞くと」

「うむ。バカな誰かだろうな。なあ佐藤」

本人はバレた！？（以下略）

「で、この2人はどうする？リーダー？」

俺はめんどくさいので・・・

「あゝ、煮るなり焼くなり好きにどうぞ」

「うん、それは助かる」

「ため！裏切り者！」

と佐藤。

「・・・ひどい」

と岡田。佐藤、岡田。俺はお前らを裏切ってないぞ。元から仲間じゃ無いしな。

「お前らはこつちだ」

「・・・」

2人はだまって生徒指導室へと連行された。普通は職員室なのだが、2人はこれが2度や3回目ではない。

「はあ・・・」

深くため息をつく。というか俺は前に出される理由はあったのだからか？

「いつも大変だねえ・・・」

「おう朝日。全くだ・・・」

とにかく体育は自習。体育の自習なのでまあ休み時間のようなものだ。

## クラスメイト（後書き）

続々と新キャラが出てきましたね。

実のところ、問題児トライアングルは実在しましたw

というか僕だったんですけどねw

もちろんのぞきなどはしていないのであしからず。

では次回は勇人たちが通う大東高校についてのお話です。

## 大東高校

アホ2人が生徒指導室に連れて行かれている。ここでこの大東高校を説明しよう。

この学校では俺が知っているだけでもすでに2人歴史的有名人の子孫を入学させている。そのため外国人も、少なくはない。

しかし、俺のような特に有名人の子孫では無いやつもいる。しかしその人数は究めて少ない。さらに男子がなぜか少ない。1クラスだいたい男子は4〜5人程度。それが4クラスなので……。

その代わりと言っちゃなんだが、女子が多い。1クラス30人程。しかし……いくら男子が少ないからって……。

(女子と体育を合同にするか……?)

今は冬だから良いが……。プールまでいっしょだったのは参った。って言っても1回しか入ってないけどな。それにプールの後は美長が切れやすくなるしな。なぜかは知らんが。

体育の授業はテキストにすぎた。そして後は平和に終わり4限目が終了。昼食になった。

「おい、勇人」

声をかけてきたのは佐藤だった。後ろには岡田もいる。

「なんだよ」

短く返すと

「俺さ、室内温水プールの無料券、当てたんだぜ！」

なんだこいつ……。プールでなんでこんなに大騒ぎするなよ。と思いつながらチケットを見ると

「ふん……。ってこれ！最近オープンしたばかりのどこじゃないか！」

前にTVでやってたがウォーターライダーやめちゃめちゃ深いプ

ールとかあるらしい。室内で温水だから冬でも大丈夫だしな。

「それだけじゃねーぞ？これは限定100人に当たるプレミアムチケットだ！」

ちなみにプレミアムチケットとは中にある売店や有料のウォーター 슬라이ダーも無料になるらしい。

「そりゃあ……。すごいな。で、なんだ？自慢か？」

俺が嫌みっぽく言うと……

「俺はそんな小さいやつじゃねーぜ？」

「じゃなんだ？ミジンコか？と思うがと思うが口には出さない。」

「まあ？そのプレミアムチケットは1枚で6人まで行けるんだぜ？」

「……。それで？」

「あと三人、お前が決めるよ！」

佐藤にしてはなんかこっちに有利な気がするが。

「いいのか？」

「うんうん、いいって。そのかわり……」

「かわり？」

「美少女戦国武将を2人連れてくること！」

……。そんなことだと思っただぜ。確かに同居はバレてないが美長、実理と俺が仲良いことは知っている。まあその2人は言われなくても連れて行くとは思ってたけどな。こんどはキッチンだけじゃ済まなさそうだな。となると……

「あと1人は？」

「別に？誰でもいいぜ？」

とだけ言っただけで2人は去っていった。正直プールに誘うほど仲の良いやつはあまりいない。しかもプールだしなるべく女子はさげたいなあと思っただけで……。あと思っただけで……

「……。朝日」

「え！？な、なになかな？」

「プール……。行く？」

## 大東高校（後書き）

少しは設定がわかっていただけたでしょうか？

次回はプールです。

いや……。まあプールまで行けるかはわかりませんが……。では次回もよろしく願いします！

## 準備

俺が聞くと・・・

「・・・」

朝日は黙り込んでいる。

「おい？ どうした？ 嫌なら別に無理強いはいしないが」

少し考えてから朝日は

「うっん。嫌じゃないよ。行くよ」

なんか苦笑い的な笑顔で返してくるのだった。

さて、家に帰り美長と実理にプールのことを話すと・・・。

「へへ。別にいいんじゃない？」

とすぐOKを出す実理と

「え・・・。プールってあれよね？ 水着よね？」

と当たり前前の事を言っている美長。水着じゃなかったら何で泳ぐつもりなんだ？

「じゃあ2人ともOKってことでメール送っとくぞ？」

俺が確認のために言うと・・・

「ちよつと待ち！」

「な、なんだよ実理？」

「新しい水着とか買わなくて良いの？」

ああ。そういえば前にプールしたのって7月のはじめだったか？今年はどうかのアホ2人がプール壊して1回だったもんな。

「確かに小さくはなってるかもな？」

「で、プールはいつ行くんだ？」

「今週の日曜だったさ」

「じゃあ土曜日行こうか」

「どこに？」

と俺が聞くと実理は

「頭悪いわね。まあ、土曜日のお楽しみってことで！今日は美長とガールズトークするからバ〜イ！」

そう言っただけで実理は美長を連れ去り走っていった。・・・ところで土曜はどこ行くんだろ？

〜土曜日〜

みなさんはよく後のことを考えて行動しましょうと言われてましたか？でもそう言われても目先の幸せしか見えないものですよ〜。だから治らない、と言う人も多いと思います。

・・・しかし、今日の出来事で少なくとも自分自身は考えて行動しようと思えましたね。はい。

「ね〜、勇人。これおどう思う？」

「・・・知らん」

「ちよつとー！何怒ってんのよ？」

「怒ってない」

自分的にはけっこう頭が良い方と思っていたんだが・・・。昨夜の会話からこうなることはわかっただろう。

「ここに来る前は普通だったのに」

まあお前がただの買い物って言うからな。でも買い物は買い物でも・・・



「水着売場なんて聞いてねーぞ！」

俺は昨夜、水着をひっぱり出してきて履いたが別にサイズは合ってたから買わない予定だったのに……。

「はいはい。文句言わな〜い。勇人、この水着どう？」

「こつち向けるな」

一方の美長はどの水着にしようかだいぶ迷ってるようだ。さっきから一言もしゃべってないし。実理のわけわからん話しに付き合うのもメンドーだったので気になっていたことを考える。1番気になるのは、あの朝日の反応だ。特に皆と仲が良いわけでは無いが佐藤や岡田ともそれなりにしゃべっているから何か用事でもあったのだろうか？などと考えていると……

「あ、あれ？ あいつらは……？」

どうやらどこかに行ってしまったようだ。……確かあいつら2人とも極度の方向音痴だったような？

ま、迷子センターから放送がかかるまでウロウロするかな……。

「ってあいつは？」

肩にかかるほどの髪。少し細めで男にしては低い身長……。

「朝日か？」

俺は同じ水着売場でキョロキョロしている朝日に声をかけようと近づく。

「おーい！朝日！」

「！」 直後ダッシュ

ええ！なぜに！？逃げられる理由も知らないがとりあえず追いかける。

準備（後書き）

はい

やはりプールまで行けませんでした。

すいません・・・。

自己都合でたぶん次回もプールに行けそうにありません・・・。

次々回かな？そこらできちんと出しますので

期待している方（居るかどうかわかりませんがw）

お楽しみに！w

ではご指摘、ご感想お願いします！

## 悲劇の連続

「ちよっ！待てよ朝日！」

叫ぶが聞こえてないようだ。しかし走るスピードは少しだが差がある。のでどんどんと追いついている。よし、手を伸ばせば届く距離なのでつかもうと前のめりになったとたん……。

「!?!」

急に朝日がほぼ直角に左へ曲がる。そのまま俺は……ガシャーン！

となにか小さな個室みたいなところへつつこんでしまった。ってか何か床がフニフニしてるんだが？不思議に思い下を見ると……

「み、美長!?!」

「ゆ、勇人!?!」

2人いつしよに驚く。まあそりやそうだ。ってそうじゃない！美長は水着の試着中だったらしく下はつけていたのだが、上は……まだみたい。

「……勇人?」

こ、これは！美長の攻撃色だ！

「え、え〜とこれはだな……」

とりあえず言い訳を考えるが……。その言い訳が思いつく前に「まず出て行きなさい？それともここで人生終えてみる？」

う〜ん、ダメみたいだ。だ、だがここで引き下がるわけにもいかない。美長はいつの間にか上も着てるようだし。遺言代わりに事実を話そう。

「いや、実は朝日が……って目があ！」

視界が一瞬にして真っ暗&激痛。

「ここは女性用の水着売場よ？なんで朝日君が出てくるのよ」

あ、確かにそうだ。それはそれでおかしい。ならば・・・

「さつさとこつからおさらば・・・」

ダツと試着室から飛び出そうとすると・・・ドン！と何かに押し戻された。

「・・・え？」

と半分声にならない声を出す

「ごめーん、おもしろそうだからそのまま置いてね」

実理・・・か？あいつはそう言ってシヤとカーテンを閉める。

「・・・。」

・・・中にはまだ美長がいるというのに

もう俺は痛みにも慣れたらしい。人間慣れる生き物だと聞いてたが痛みに慣れるやつはそういないだろう。美長もこれ以上俺に害を与えるつもりは無いらしく『明日はプールなんだから早く寝ちゃえ！バカ！』とのこと。確かに俺も少々疲れたし何もすることが無いのでおとなしく寝ることにした。

自分が思っていたより疲れていたらしく俺はそうとうぐっすり寝ることができた。なので朝はいつもより遅く10:20に目が覚めた。・・・集合は10:30だと言うのに。

「って寝過ぎしたあ！」

(お、おかしいぞ？きちんと9:00には目覚ましをセットしたのに！)

と思いつつ裏切り者の目覚まし時計のセット時刻を見る

『セット時刻PM9:00』

「・・・。」

夜にセツトしてどうすんだ俺……。

「って！こんなことしてる場合じゃねえ！」

ちなみに美長はというと心配ない。あいつは自分が楽しみにしている行事などがある日は絶対に寝坊しない。でも起きたなら俺を起こしてくれてもいいのに。いつも思うけど。とりあえず昨夜きちんと準備しておいたバックを走りながら取りあわてて家を出るのだった。

## 悲劇の連続（後書き）

ようやくプールの手前まで行きましたw  
では来年はプールの話からという季節感の欠片もない話しになりま  
すが  
よろしくおねがいます！

## IN プール

息を切らせながらも集合場所に近づいた。しかし・・・  
(あれ？みんな外にいるぞ？)

てつきりみんなもうプールに入っていると思ったのに。そしてみんなの方へ行くと

「あ！ やつと来た。遅いぞ！」  
と、俺より長身の佐藤が言ってくる。

「悪い悪い・・・」  
こいつに説教されるとは思っても無かったが、今回は明らかに俺が悪いので謝しておく。

「それはそうとなんでまだみんな外にいるんだ？」

不思議に思い俺は聞いてみる。すると・・・  
「いやな？ お前だけならみんなで行ってるけどよ。朝日までこないんだよな」

俺だけなら入ってるか・・・。まあ逆の立場なら俺もそうしてるけど。

「朝日も遅れか？」

あいつらしくも無い、と思っていると俺の携帯が鳴り出した。取り出してみると、朝日からのメールだった。

『ごめん！少し急用ができたからみんなで先にプールに行つてて！僕も後で行くから』

とのことだった。やっぱりなにか用事でもあったのだろうか？それをみんなに伝えると

「そっか。なら先に行こうか」

佐藤が言いみんなプールへ向かうのだった。

さて水着に着替えプールサイドへ来た瞬間・・・

「うお〜！ 海だあ！ 泳ぎまくるぜ〜！」

とか言っただけで走っていった佐藤。海じゃないかな。そして

「カシャ！ カシャカシャ！」

夢中で何かを撮っている岡田はほっとして・・・。一通り泳いでいたら実理がやってきて

「ねえ。そろそろお昼にしない？」

と言ってきた。時計を見ると確かにもう12:30を回っていた。

「そうだな・・・。そろそろ・・・。」

昼飯にするか、と言おうとしたところで

「ん？ あれって朝日じゃねえか？」

俺は朝日っぽいやつを見つけた。実理も見つけたらしくお〜いと手を振っている。

「おい！ 朝日！」

呼んでやると、気づいたみたいだな。

「み、みんなごめんね？ 少し用事ができちゃって・・・。」

少々息を切らしながら言ってくる。でもさっきの所からここまでそんなに距離はないんだがな。とか考えていると

「ねえ今からお昼にするけど朝日君も来る？」

と実理が聞いていた。しかし朝日は悩んでいた。う〜ん。遅れてきたので少し引き目に感じているらしい。そんな気にしなくてもいいのに。

「いっしょに行こうぜ」

と、言い近づいて朝日の肩にポンと手を置いた。すると・・・

「！」

朝日はなぜか俺のほうを見てハッ！とした表情になり

「ぼ、僕はもう少し後にするよ！ ちょっと泳いで来るね！」

と言い走り去った。なんだあいつ・・・？



とりあえず泳いでいた美長を連れて3人で（アホ2人はずっと遊んでいたのでほっておく）。昼食をとるため売店に入る。

「じゃあ美長といっしょに食べ物買って来るね」

と言いつつ実理と美長は買いに行ったので俺はボーとプールサイドを見ていた。

## IN プール（後書き）

あけましておめでとございます！

1日遅れですいません・・・。

次は朝日君の話、中心になります。

そしてもうプールの話は終わります。

では今年もよろしく願います！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3301z/>

---

偉人パラダイス

2012年1月2日11時48分発行